

「平和の炎賞」受賞記念ツアー・ウィーン 6 日間

一般財団法人 坂本理馬財団理事 右城 猛

1. まえがき

幕末の時代、「自由と平等と平和」に命を賭け日本を世界に開くきっかけをつくった坂本龍馬のことを、高知県立坂本龍馬記念館が、「お龍と龍馬 愛の賛歌」というオペラ歌劇に脚本化した。

この話を、ウィーンで活躍中のオペラ歌手 示野由香さんが、オーストリアの名家ハプスブルク家が主宰する平和団体「平和の炎」のヘルタ理事長に話したところ、「平和の炎賞」が、坂本龍馬に授与されることに決まった。

「平和の炎」は 2000 年に設立され、戦地の子供たちの支援活動などとともに、2008 年から世界平和に功績のあった個人・団体に「平和の炎賞」を贈って顕彰している。

5 月 15 日(木)にウィーンで開催される授与式に、日本からは森健志郎館長を含む 16 名が出席することになった。

2. 旅行の概要

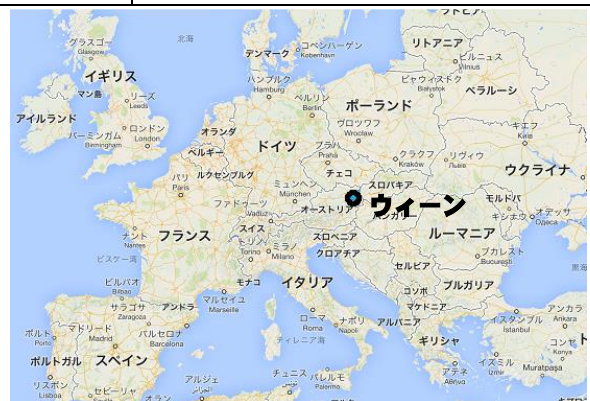
授与式は、5 月 15 日の 19 時からであったが、観光を兼ねて 5 月 12 日に羽田国際空港を出発。フランクフルトで乗り継いでウィーン入った。

翌日の 13 日は、日本大使館の表敬訪問とウィーン市内観光。14 日はウィーン郊外にあるメルク修道院見学とドナウ川クルーズ。

ホテルは 4 泊とも、ウィーン市役所の近くにあるホテル ザ・リバンテ パーラメント。授与式は、ホテルのレストランで行われた。

日 程

月 日	行 事
5 月 12 日 (月)	11:25 NH-223 で羽田国際空港発 16:35 フランクフルト空港到着 17:50 オーストリア航空にてウィーンへ 19:20 ウィーン空港着
5 月 13 日 (火)	9:00～16 時 専用車でウィーン市内観光 11 時 日本大使館 18 時 ウィンナー・ラートハウスケラー でウィーン名物料理 クラシックコンサート鑑賞
5 月 14 日 (水)	9 時～17 時専用車でウィーン郊外観光 メルク修道院, ドナウ川クルーズ
5 月 15 日 (木)	終日自由行動 17 時～「平和の炎賞」授賞式
5 月 16 日 (金)	6:10 専用車でホテル出発 9:10 ウィーン空港発 10:40 フランクフルト空港着 12:00 フランクフルト空港発 機内泊
5 月 17 日 (土)	6:35 羽田国際空港着 8:05 羽田空港発 9:30 高知空港到着



オーストリアとウィーン位置図



ウィーン旧市街



日本大使館，シェーンブルン宮殿位置図



ドナウ川クルーズ

3. オーストリアの概要

正式名称はオーストリア共和国。面積は 84,000km² で日本の約 1/5。北海道とほぼ同じ広さ。人口は、大阪府と同じ 840 万人。

国旗は、海援隊旗と同じである。



オーストリアの国旗

GDP は 41 兆円で世界第 27 位。日本の 1/12(日本は世界第 3 位)であるが、一人当りは、490 万円で世界第 11 位。日本の 380 万円よりはるかに多い。

首都ウィーンの人口は、約 170 万人。鹿児島県とほぼ同じである。

4. ウィーン市内観光(5 月 13 日)

(1) ホテル周辺

早朝、市内観光の前に、宿泊しているホテル周辺を家内と散策した。



ウィーン市内には、大理石で造られたゴシック様式とバロック様式の美しい建築物が多い。歴史的価値が高く、建物取り壊すことはできない。このため駐車場ができない。車は、路上駐車である。



自動車の増加を抑制するために自転車道が整備されている。平成 18 年に訪れたときに見たミュンヘンやブダペストの街と雰囲気似ている。



新聞、雑誌、花を売る屋台



路面電車が頻繁に行き交い、市民の足として利用されている。



地下鉄の入り口。交通機関が非常に発達している。市民はとても便利である。



ゴミ収集車に出会った。ウィーンの街にはゴミが落ちていない。掃除が行き届いている。



信号機のポールには、いたるところにゴミ箱が取り付けられていた。ポイ捨てる人はいない。

(2) ベルヴェデーレ宮殿とヨハンシュラトウス像



最初に訪れたのは、ベルヴェデーレ宮殿。ハプスブルク家に仕えたオイゲンが、夏の離宮として18世紀に造ったバロック建築の宮殿。オイゲンの死後、ハプスブルク家のマリア・テレジアに売却された。現在は絵画館となっている。オーストリアで2番目に大きい美術館。



ベルヴェデーレ宮殿の前で記念撮影。



街中を観光客用の馬車が走っていた。



ドナウ川の支流のウィーン川。この川の両岸に広大な市立公園が広がっている。



「ワルツの父」ヨハンシュトラウス像が公園の中に建てられていた。JR 岐阜駅の前の織田信長像のように金色に輝いていた。

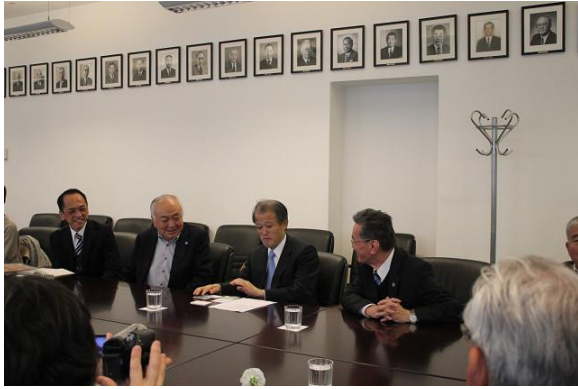
彼のワルツに、ウィーン会議に来ていた各国の代表者が陶醉した。「会議は踊る。されど進まず」という有名な言葉が残っている。



日本大使館に向かう途中に「日本橋」という日本料理店があった。うどんセット 17.9 ユーロ(2500 円), ぶっかけうどん 12.9 ユーロ(1800 円)。結構高い値段である。ウィーン市内は日本と比べて物価が相対的に高いと感じた。



日の丸の国旗が掲げられたオーストリア日本大使館と総領事館が並んであった。大使館は外交のための施設。総領事館は、オーストリア在住の日本国民の保護や通商関係の援助、ビザの発行などを行っている。



大使館を訪問した目的は、坂本龍馬が「平和の炎賞」を受賞することに決まり、授与式に参列するため坂本龍馬財団のメンバー16名で来たことを伝えるため。

大使館に入るには空港のようなX線の保安検査を受けなければならない。

現在の大使は竹歳誠氏。国土交通省の事務次官、内閣官房副長官を歴任された方で、その前には尾崎正直氏(現・高知県知事)の上司であったこともあって、「月見をしながら桂浜で土佐の辛口の酒を飲むのは最高」と気さくに話をしてくれた。大使館に入るのは初めての経験で緊張していたが、一気に和らいだ。

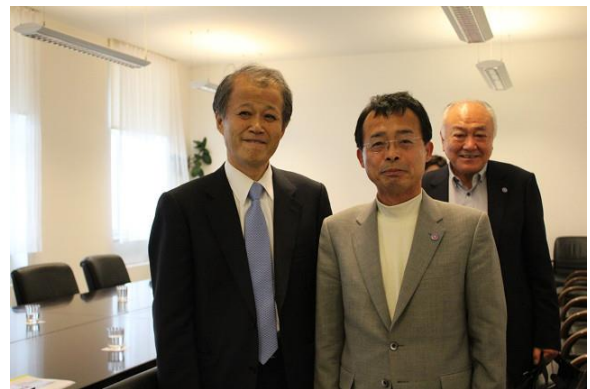
前大使の岩谷滋雄氏は、高知県の出身。会議室の壁には歴代大使の写真が飾られていたが、岩谷氏や竹歳氏の写真はなかった。最近は飾らなくなっているようである。



尾崎正直知事の特命でツアーに参加している高知県文化生活部の原哲副部長は、高知県産品がオーストリアに輸出できる可能

性を探っておられた。フランスでは高知産のユズが高い評価を得ている。オーストリアにも買って貰える可能性がある。

現在、高知県が全国に先駆けて取り組んでいるCLT(クロス・ラミネーテッド・ティンバー、直交集成材)は、オーストリアを中心として発展してきたもの。世界を夢見た龍馬の力で、高知県の企業がヨーロッパへ進出できるチャンスになるかも知れない。



竹歳大使と記念撮影。立派な人ほど偉ぶることがないということを改めて感じさせられた。

(3) シェーンブルン宮殿

ハプスブルク王朝の歴代君主が主に離宮として使用してきた宮殿。17世紀後半に建てられたバロック建築の宮殿と庭園群は世界遺産に登録されている。宮殿には1,441室もの部屋がある。年間150万人の観光客が訪れている。



宮殿の背後に広大な庭園がある。



宮殿のバルコニーから眺めた庭園



美術史美術館



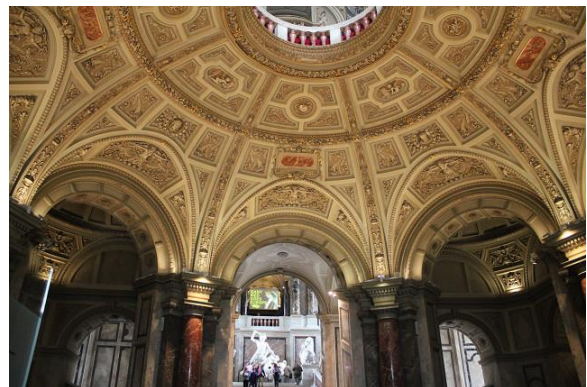
オーストリアでは、随所にレンタル自転車が置かれていた。

(4) 美術史美術館ウィーン

美術史美術館ウィーンは、ハプスブルク家の皇帝が何世紀にもわたって収集した美術品を収納するために建てられたもので、世界で最も重要な美術館の一つに数えられている。



ウィーンの建築家ハーゼナウアホとドイツの建築家ゴットフリート・ゼンバーの設計で 1891 年に建てられた美術館。



床から天井装飾まで豪華絢爛そのもの。



アントニオ・カノーヴァ(1757-1822)によって作られた大理石の彫刻。



美術館の中にある「カフェ・ゲルストナー」。世界一素晴らしいカフェ。ここに座ってゆっくりコーヒーを飲んでみたかった。スケジュールがタイトすぎた。残念。



豪華なデザインの中央階段。素晴らしい。



マリア・テレジアと夫のフランツ 1 世の肖像画



数々の世界的名画に、ただただ圧倒されるばかり。すごい。



青い衣裳のマルガリータ王女(1659 年)



ラファエロ 『草原の聖母』 (1505 年)

(5) トリップアドバイザーでの夕食



建築家フリードリヒ・フォン・シュミットの設計で、1872 年から 1883 年にかけて建設されたゴシック様式のウィーン庁舎。

この市庁舎の地下に 100 年の歴史と伝統を誇るレストラン Rathauskeller (ラートハウスケラー) がある。

ウィーンでの最初のディナーは、ここ。貴族になった気分でウィーン名物ウィンナシュニッツェル（ウィーン風カツレツ）を食べた。



レストラン ラートハウスケラーの入り口。



カツレツは、牛肉は筋肉繊維の向きに沿って叩いて、薄く伸ばすように調理されている。大きさの割に量は少ないが、それでも私には多すぎた。1/3 を残した。

森健志郎館長が文句を言っていたが、確かにここの料理は大雑把すぎる。日本料理のような繊細さに欠ける。



デザートのスィーツ

(6) コンサート鑑賞

ウィーンは音楽の都。「ウィーンに来て音楽を聴かずには帰れない」。夕食の後、そのような思いでヨハン・シュトラウス像のある市民公園に位置するクアサロンヘクラシックコンサート「Strass & Mozart Konzerte」を聞きに行く。

私は、元々、音楽に興味がない上に、アルコールが入っていたのでほとんど夢の中であった。



クラシック音楽の演奏とダンス



休憩時間のドリンクサービス

5. ウィーン郊外観光(5月14日)

(1) ウィーンからメルクヘ



ウィーンから高速道路 A1 を専用バスで約 1 時間西に向けて走る。



高速道路 A1 の上に架かるオーバークリッジには、外ケーブル構造のプレストレストコンクリート(PC)橋がよく採用されていた。



メルクの町の手前で、たくさんの風力発電を見た。

フランクフルトからウィーンに飛行機で着いたときも、風力発電の風車が無数に立っているのを上空から見た。1,000 基は優に超えていた。

オーストリアには、稼働中の原発は1基もない。しかし、原発電力をドイツから輸入している。2015 年度までに原発電力の輸入ゼロを目指し、再生可能エネルギーを推進している。

オーストリアは北海道くらいの面積に、840 万人が住んでいる。電力の 60%を水力が占め、風力発電はまだ 3%にすぎない。

(7) メルク修道院

メルク修道院は、ベネディクト会派の世界的に有名なバロック建築の修道院。

1702 年から 1736 年にかけて、ヤコブ・ブランタウアーの設計により建設された。見どころは、ヨハン・ミヒャエル・ロットマイヤが修道院の教会に描いたフレスコ画と、中世の手描き原稿が無数に納められた図書室。この原稿には、有名な楽譜やパウ・ル・トロガーによるフレスコ画も含まれている。



一段高い駐車場から眺めた修道院



東ファサード



高位聖職者の庭。台形をしていて、奥の幅を狭くすることで奥行きを感じるようにできている。



メルクの十字架の表



メルクの十字架の裏

キリストがはりつけにされた木片を含んだ「メルクの十字架」。その表面には、十字架にかけられてキリストと、周囲を囲む4人の福音伝道者が彫られている。裏面には宝石がちりばめられている。



「鏡の間」には、特別礼拝で使用される礼拝調度品が展示されている。



金庫の蓋の裏面。この複雑な構造には驚いた。真ん中に鍵穴があり、外から鍵をさして回すと蓋が開く仕組みになっている。



「大理石の間」。実際にザルツブルクの大理石が使用されているのは扉の鏡板と上部の飾りのみ。壁は大理石に見せかけた漆喰で描かれている。

天井のフレスコ画は、ハプスブルク統治時代時代にパウル・トローガーによって描かれたもの。見る角度によって形が変わる「だまし絵」となっている。バロック時代にはこのようなだまし絵が流行っていた。



キリストと二人の聖人の像がある修道院教会の塔



大理石の間を出るとバルコニーにでる。眼下にはメルクの町並みが広がり，すぐ横にはドナウ川が流れている。

バルコニーは，10万冊の貴重な保管が収納された図書室へと続く。図書館は残念ながら撮影禁止であった。



修道院教会。金，オレンジ，オークル，灰色，そして緑と暖かな色調でまとめられたこの教会は，当初ゴシック様式であったが，18世紀に現在みられるようなバロック様式の教会へと改装された。



内装にはイタリアの建築家アントニオ・ベドゥッチの影響が見られる。天井にあるフレスコ画はザルツブルクの画家ヨハン・ミヒャエル・ロットマイヤが描いている。





修道院の建物を出て、これから修道院の園内のレストランでランチ。

(8) ワッハウ渓谷ドナウ川クルーズ



修道院の下が、クルーザーの乗船場になっている。前方のクルーザーに乗ってドナウ川をデュルンシュタインまで下る。



「横にのびた摩天楼」あるいは「信仰の要塞」などと呼ばれるメルク修道院。



アーチの水道橋とシェーンビューヘル城



船内の客室の様子



ドナウ川はヨーロッパでは2番目に長い大河。ドイツ南部のシュヴァルツヴァルト(黒い森)に端を発し、南東方向に流れ、東欧各国を含む10カ国を通して黒海に注ぐ重要な国際河川である。延長は2,860m。



デッキに座って兩岸の景色を眺めながら、メルクからドナウ川を下る。クレムスにいたる 30 数キロメートルの区間は、ワッハウ溪谷と呼ばれ、ドナウ川の中では最も風光明媚なところ。ユネスコ世界文化遺産に指定されている。



9 世紀に要塞として建設されたシェーンビュール城。「ドナウの女王」とも称えられる美しい城。



アッグシュタイン城



ヴィレンドルフという旧石器時代の出土品で有名な小さな村。古代人の豊饒(ほうじょう)のシンボルとされる「ヴィレンドルフのヴィーナス」もここで発見された。その女性裸像の石像を大きくした記念碑が建てられている。本物は、ウィーンの自然史博物館に保存されている。



ドナウ川の沿線には、ぶどう畑が広がっている。白ワインの産地として有名。



ライン川のローレライにも見られた落石防護柵リングネットが設置されていた。ヨーロッパでは、リングネットの施工が多い。



ヒンターハウス城



ヴァイセンキルヒュン



アッグシュタイン。丘の上にそびえ立つ城跡。



オーストリアの国旗をなびかせながらドナウを下るクルーザー。

(9) デュルンシュタイン



クルージングを終えて、デュルンシュタインの修道院・聖堂参事会の前で下船する。



これからデュルンシュタインの街を見物する。森館長は少々お疲れのご様子。



城門を潜ってデュルンシュタインの街中に入る。



囚人をさらし首の刑にしていた場所



5月に建てられるメイポール



ハウプト通り



店の壁には、絵看板が取り付けられている。牛の絵があるので肉屋か？



ハウプト通りの絵看板



真っ赤なバラの花が咲いていた。



居酒屋 バー



ここは白ワイン生産の町。ぶどう畑が広がっていた。



土産物店



左が居酒屋で右が土産物店

(10) レストランでディナー



ウィーン市内に帰り、ガイドの千竈さん推薦のレストランで食事。

今回のツアーでは、誰一人ドイツ語が話せないにも関わらず、添乗員が付いていなかった。千竈さんが、添乗員がするはずの仕事も親切にしてくれたので本当に助かった。



食事の後、自己紹介。

6. 平和の炎賞の授与式

(1) 授与式の準備

13日と14日は天候に恵まれたが、本番の15日は朝から雨。授与式の会場は、宿泊しているホテルのレストランに決まった。

昨日の段階では、まだ、式典のタイムスケジュールが我々に知らされていなかった。今朝、初めて、「平和の炎」のヘルタ理事長の秘書のシビレさんを通じて示野由佳さんに連絡があり、示野さんが作成したメモ書きが渡された。式典はチャリティー方式で行われるようであるが、経験がない我々には理解に苦しむ内容であった。

9時、打合せのために森館長、坂本さん、前田さん、竹内さん、原さん、阿部さん、それに私の7名がホテルのレストランに集合したが、式典を企画した関係者が誰一人

いないのでメモ書きの問題点を確認するだけに終わった。

「主役になりたい者ばかりで、世話役が一人もおらん」森館長のこの発言は、真に的を射ていると思った。



レストランでの打ち合わせ

司会役の山本真千さんと連絡がとれ、16時から再度打合せをすることになった。

山本真千さんは、大阪の出身。若い美人の独身女性。「おかんサービス。真心と共に参上します！ 通訳&翻訳」と名詞に書かれていた。目指していたオペラ歌手を諦めて、通訳やイベントプロデューサーを商売にしている。頭の切れが抜群によいやり手女性である。

山本さんがシビレさんに話す言葉は、機関銃のように早く威圧感のあるドイツ語。何を話していたのかさっぱりわからなかったが、私たちの提案が100%受け入れられたことを知り、ホットした。顔は上品だが、さすがは関西人。押しが強い。

日本からの参加者は、全員がドレスアップして、開会の1時間前の18時にロビーに集合。お互いが写真を取りあっていた。

東京から参加された武内ともこさんから、「緊張しているのが顔に表れているよ」と指摘された。羽田に帰って彼女からいただ

いた名刺を見ると、「一般社団法人終活カウンセラー協会 上級終活カウンセラー」の肩書きが、名刺の裏には「産業カウンセラー、心理相談員、DV カウンセラー」の資格が書かれていた。一瞬にして、私の心理状態を見破ったのであろう。しかし、武内さんのこの一言で、随分とリラックスできた。



森直樹・明美ご夫妻。



片岡，中野，前田，武内さん。

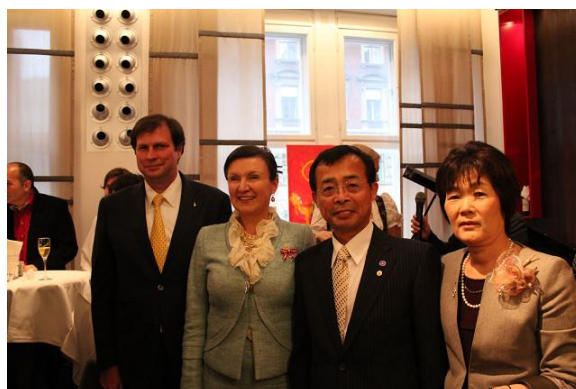


筆者と家内

(2) 「平和の炎賞」授与式



16 時 30 分，開場時間に合わせて中に入ると、「平和の炎」のヘルタ理事長ご夫妻や森健志郎館長は，ひな壇というべき所定の位置に立ち，すでに歓談をされていた。



示野由佳さんが私たち夫婦をヘルタ理事長ご夫妻に紹介してくれたので，挨拶をさせていただきました。

ハプスブルク家と言えば日本の天皇家のような存在。とても近くで話しなどできないと思っていただけに感激した。フランクでフレンドリーなのは驚いた。

19 時開式。参加者は約 80 名。2 日間観

光ガイドをしてくれた千竈(ちかま)さんも約束通り来てくれた。

最初に1分間、平和の祈りを捧げる。こちらの式典の習わしのようなのである。司会の山本真千さんが式典の趣旨を紹介したあと、森健志郎館長が、15名の仲間と共に日本から来たという挨拶をされた。



式が始まるまでドリンクを片手に歓談



森館長、右城、阿部、竹内、小川ご夫妻



森直樹社長、竹内夫人、森夫人



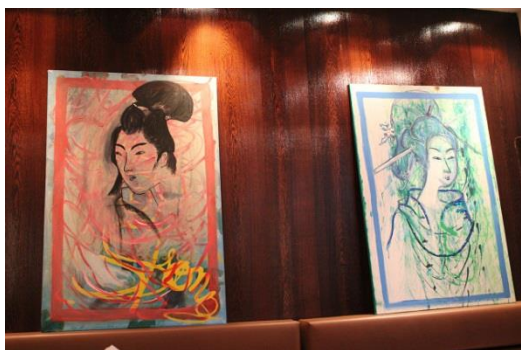
挨拶をする森健志郎館長



示野由佳さんの挨拶



司会の山本真千さん



会場に展示された絵画



お二人の熱唱に耳を傾ける参加者



このような授与式を日本ですれば、一人5,000 円程度の参加費を徴収しなければ運営できな。ところが無料であった。スポンサーの協力金、チャリティー福引きから得た収入などで賄われたようである。

会場には、現代絵画、絨毯、花瓶などの工芸品が展示されていた。授与式の後には、民族衣装などのファッションショーがあった。出展者から広告費として徴収しているのだろう。チャリティー福引きとは、参加者の寄付金(10～20 ユーロ)と引き替えに、空くじなしの券を渡すもので、これによっても利益を得ているのだろう。

展示物の紹介があった後、ソプラノ歌手の示野由佳さんとテノール歌手のディーター・パッシングさんが、「お龍と龍馬 愛の賛歌」を披露した。



授与式で、挨拶をされるヘルタ理事長



トロフィーと表彰状が森館長、示野由佳さんに贈られた。トロフィーは、四角い大理石の台の上に、平和の炎を形取った木が取り付けられている。



お礼の挨拶をする森健志郎館長。通訳は、振り袖姿をした近藤美香さん(15歳)。愛弓さんの娘さん。



お礼の挨拶をする坂本登さん。



お礼の挨拶をする筆者。通訳は、ウィーン在住の近藤愛弓(あゆみ)さん。

ウィーンに着いて森館長から、「右城さんは、龍馬財団の事理として、授賞式で挨拶をしてもらうので何か考えといて。話す内容は紙に書いて、通訳の方に事前に渡して」と言われた。まさか授与式でスピーチが出来るとは思ってもいなかった。このような光栄な機会が与えられたのは、第一コンサルタントがチャリティー協力金を出していたことに他ならない。下記の挨拶文を書いて、通訳の近藤愛弓さんにお渡しした。

『皆さん、こんばんは。私は、坂本龍馬財団の理事をしています右城猛でございます。この度は、「平和の炎賞」をいただき、ありがとうございました。日本の奈良や京都には、1000年以上の歴史を持つ仏像や寺院がたくさんあります。ここウィーンには、ゴシックやバロックの素晴らしい建物、世界的価値がある彫刻や絵画があります。人類の財産と言うべき文化遺産を守り、そして後世に遺してゆくためには、世界が平和でなければなりません。私たち坂本龍馬財団は、龍馬が目指した戦争のない平和な社会を守るための活動をしています。その活動が、このような形で評価されましたことに感謝申し上げます。ダンケ シェーン』



坂本龍馬記念館から和紙で作られた高知産の名刺入れなどお礼の品物が関係者に配られた。



日本大使館を代表して、二等書記官(広報文化班長)の川原剛さんが出席された。



会場に展示された竹内土佐郎先生の書



竹内先生からは、自作の書がヘルタ理事長と秘書のシビレさんに贈呈された。



森館長の要望に応え、坂本龍馬のポスターにサインするヘルタ理事長



副理事長もポスターにサイン



「平和の炎」の二人のサインが入ったポスター。高知県立坂本龍馬記念館に宝物がまた一つ増えた。



スポンサー名が入った Tシャツの紹介



軍人はヘルタ理事長のお友達



チャリティー福引き協力の説明



武内ともこさんは場慣れしている



参加者の女性に頼まれて、展示されている絨毯の前で一緒に記念撮影



民族衣装のファッションショーやダンス



皆さんお疲れ。一休み



平和の炎のトロフィーを手にして喜ぶ坂本龍馬財団のメンバー



坂本登さん，森館長は腹ごしらえ



アンコールに応える示野さんとディーター



竹内土佐郎先生は白ワインに大満足



最後に坂本さんと私を会場の皆さんに紹介していただいた。



北海道北広島市から参加した阿部直美さん。阿部さんは、2011年の「龍馬とアメリカで発信!ハワイ&ニューヨークアメリカツアー」にも参加されている。そのときに、高知県や坂本龍馬を想って「心をつなごう」の曲を作詞・作曲されている。

式典の最後で、示野由佳さんとディーターが会場のアンコールに応じて、「友よ、人生は生きてみる価値がある」(フランツ・レハール)、「叱られて」(弘田龍太郎)、「ありがとう」(濱口賢策)の3曲を披露した。



ウィーン在住の女性2人と一緒に記念撮影。写真右から2人目の女性は、博士の青木ヨハンナたか子さん。会場のオーストリア人と話すときに通訳をしていただいた。名刺には、日本カトリック教団副牧師，ウィーン第一司教区副社長などとドイツ語で書かれていた。結婚すると、相手の姓が自分の姓名の前に付くだけのようである。



高知県文化生活部の原哲副部長



最後に皆さんで記念撮影

7.4.あとがき

今回のツアーは、私にとって極めて貴重な経験となった。

オーストリアは、高知とは文化が全く違う遠い異国と思っていた。しかし、共通点やいろいろな繋がりがあるのに驚かされた。

まずは、オーストリアの国旗が海援隊旗と同じであること。坂本龍馬の「平和の炎賞」受賞は、日本人では薄井憲二・日本バレエ協会長、岩谷滋雄・前駐オーストリア大使に次いで3回目。奇遇にも岩谷滋雄氏は、高知県の出身である。

授与式で通訳をされたウィーン在住の近藤愛弓さんのお父上・近藤常恭氏は、会場にも来られていたが、ウィーンで日本食品や雑貨を売る「NIPPON-YA」を経営されている。常恭氏の祖父は、土佐藩士の息子で工学博士の国沢新兵衛。満州鉄道の理事長(総裁)も務めている。その兄の新九郎は、

土佐藩より派遣されロンドン留学後、東京に日本初の油絵塾を開き、坂本龍馬の肖像画を描いている。(出典：示野由佳 ウィーンからの眺望Ⅱ，高知新聞，2011.2.18)

現在の駐オーストリア大使は、国土交通省の事務次官，内閣官房副長官を歴任された方で、その前には尾崎正直氏(現・高知県知事)の上司。

今秋の9月6日には、オーストリアから高さ2mの「平和の炎」のモニュメントが送られてくる。そして、平和の聖地・桂浜に建てられることになっている。日本初の快挙である。

坂本龍馬が、「高知県よ、世界に羽ばたけ!，第一コンサルタントも世界を目指せ!」と言っているように思えてならない。

ウィーンでの3日間は、素晴らしい仲間に恵まれた。竹蔵誠大使やハブスブルク家の人々、そして日本からウィーンに行かれ、そこで活躍されている人達との出会いは、私にとって大きな財(たから)になった。一昨年は、台湾の李登輝元総統や許文龍氏にお会いできた。「龍馬はすごい」。私の身の周りであり得ないことが次々と起きている。



ウィーン空港の免税店で買ったオーストリアを代表する名物スイーツ「ザッハトルテ」

2014年6月1日記